

「かわいい」

赤ちゃんの小さな体を見つめる中学生の優しい眼差しからは、命の尊さや家族との温もりが伝わってきそうです。

妹背牛中学校の3年生を対象とした「いのちの授業」。10月3日と9日の2日間にわたって行われ、生徒たちが生命誕生の奇跡や命を育むことの大切さを学びました。

町内のお母さんたちに育児の大変さを聞いたり、妊婦の動きにくさを体験したり、専門家による講話で妊娠・出産のメカニズムを知ったり。

生徒たちは、たくさんの学びを通じて、命の重みを実感するとともに、自分がどれだけ大切に育てられてきたかを考え、親に対する感謝の気持ちを新たにしました。

赤ちゃんの笑顔に中学生の心がほぐれ、お母さんたちと貴重な時間を過ごした授業の一端を紹介します。



いのちの授業



親からの手紙

親子ふれあい体験には、生後2〜11カ月の赤ちゃんとその保護者7組が授業に協力しました。3年生19人が5つのグループに分かれて、それぞれの親子と交流。おもちゃを使って赤ちゃんをあやしたり、抱きかかえたりしながら、接し方を学びました。

最初は緊張していた生徒たちも小さな手足に触れながら、赤ちゃんの温もりを肌で感じ、無邪気な笑顔に癒されていた様子でした。

和やかな雰囲気の中、お母さんたちには育児について質問。生徒たちは赤ちゃんとのうれしいエピソードや育児の大変さ、妊娠・出産後の体の変化などについて聞き取り、真剣な表情で耳を傾けていました。

授業の最後には、生徒全員に保護者からの手紙が配られました。生まれた

時の感動や成長していく喜びをしたためた手紙をじっくりと読み、少し照れくさそうな表情を浮かべる男子生徒や、その場で涙を見せる女子生徒の姿もありました。



成田さんによる子育て講話

子育て講話では、拓殖大学北海道短期大学で乳児保育の講義などを行っている成田美貴さん（旭川市在住）が、赤ちゃんの寝返りからハイハイ、つかまり立ちするまでの発達段階について、分かりやすく生徒たちに教えました。

成田さんは、授業に参加した後11カ月までの赤ちゃんについて「1年で何倍も成長する時期。優しい言葉とニコツとした表情が大好きなので、たくさん声をかけてください」と、赤ちゃんとの接し方についてアドバイス。

発達に合わせたおもちゃ選びも大切とした上で「音が鳴ったり、クルクルと回るおもちゃには意味があります。ペットボトルなどの身近な材料でおもちゃを手作りすることは経済的にも良いですね」と説明しました。



助産師の講話

深川市立病院の助産師、佐藤亜也子さんが「命と体の話」と題し、胎児の成長や出産の喜び、男女の体の変化について講話しました。

佐藤さんは、ビデオ映像を流して、精子と卵子が受精する仕組みを紹介。「皆さんが生まれるきっかけとなった精子と卵子の出会い、宝くじに当たるような奇跡的な確率なんです」と、命の尊さについて述べました。

ふれあい体験

赤ちゃんの小さな手を握ったり、おもちゃで遊んだりした生徒たちは、そのかわいらしい表情や仕草に夢中になっていました。



妊婦疑似体験

生徒たちは胸部と腹部に計6〜8kgの重りが付いたジャケットを着て、妊婦の大変さを疑似体験。赤ちゃんの形を抱きかかえたり、階段を上ったりして、妊婦の手伝ってほしい場面に気づききっかけとなりました。



気軽にご相談を！

妹背牛町こども家庭センター設置

TEL32-2412

妹背牛町は10月1日から、町内全ての子どもとその家族、妊産婦らを対象に切れ目のない支援を行う「こども家庭センター」を保健センター内に設置しました。

これまで複数の課やグループにまたがっていた相談対応を一元化することで、支援体制の強化を図ります。

2つのグループで担っている児童福祉機能と母子保健

機能の橋渡し役を担う「統括支援員」を1人配置。地域の実情を把握し、育児に関する不安や心配ごとへの相談、子どもの発達を促すための療育、子どもの居場所づくり支援など、お子様が大きくなってからも安心して子育てできる環境づくりに向けて、関係機関との連携を深めます。